

第2回守谷市環境審議会における検討事項とその対応

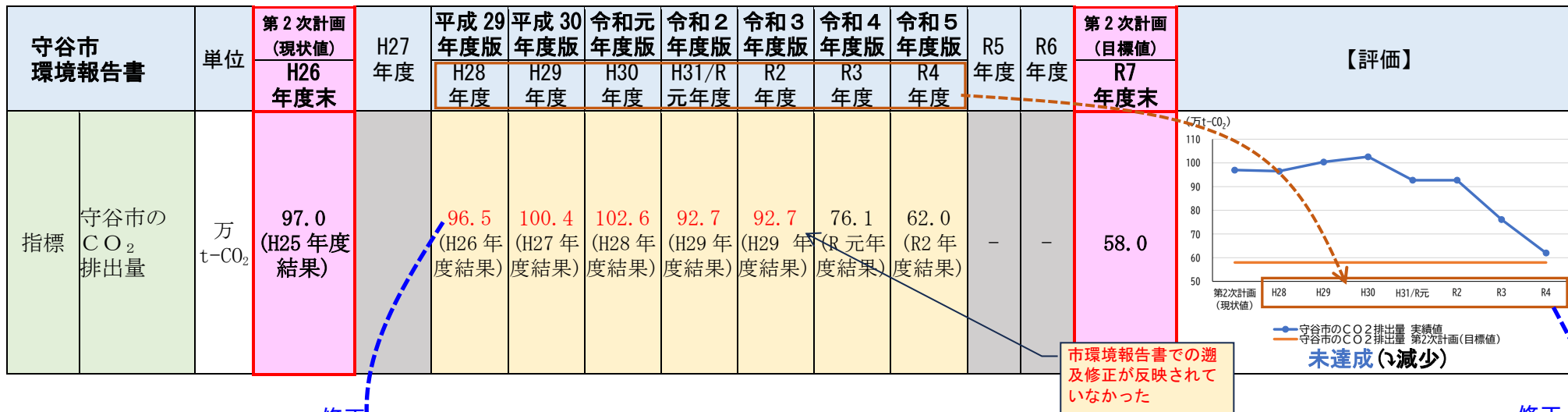
項番	検討事項	対応	該当箇所
1	「守谷市 CO ₂ 排出量」の指標について、令和2年以降が急激に減少しているが、排出量の内訳を示さないと、どの部門（産業部門・民生部門・運輸部門・廃棄物部門）に対する働きかけを行えばいいか見当がつかない。また、排出量については環境省より示されているデータより地球温暖化対策実行計画（区域施策編）の現況値としているが、その算定方法を示さないと、どの部門が、何が原因で、CO ₂ 排出量が上下しているかが分からないため次回審議会にて、その方法等を示してほしい。	・第2回環境審議会で示した指標（守谷市の CO₂ 排出量）に年度の誤りがあったため、修正した。 ・本市だけでなく茨城県全体でみても、令和元(2019)～令和2(2020)年度に温室効果ガス排出量が減少しており、要因として新型コロナウイルス感染症拡大における社会活動の停滞が要因として考えられる。 ・令和3(2021)年度には温室効果ガス排出量が増加しており、コロナ前の状況に戻りつつあると考えられる。 ・部門別の排出量の状況は「参考資料1 守谷市の温室効果ガス排出量推計の現状」を参照。	資料1 P. 3～5 参考資料1
2	「公立小中学校での環境教育としての取組事例数」、「環境に関する市民活動団体構成人数」の指標について、平成28年度からの推移をみると急激に上下しているため、カウント方法に統一性がないのではないかと思われる。あるいは、カウント数が一律な方法であるならば、その変化の理由を究明することが必要だと思う。	・カウント方法については「環境報告書」にて公表している指標であり、毎年度関係課からの報告に基づき算定している。それぞれのカウント方法に変更はない。 ・数字が変動している原因については以下のとおりと考えられる。 ①「公立小中学校での環境教育としての取組事例数」 ・どの授業を「環境教育」と位置付けるかは、学校側に委ねており、年度により各学校の担当教員が異動すること、また、世界の環境を取り巻く情勢の変化により「環境」に特化したカリキュラムが増加した可能性がある。 ・詳細は「参考資料2 環境教育部署へのヒアリング結果」に示すとおり。 ②「環境に関する市民活動団体構成人数」 ・市民協働推進課が市民活動団体を管理しており、団体の構成人数や中心年齢層を把握している。 ・中心年齢層をみると60～70歳代の市民活動団体が多くなっており、今後高齢化による団体の解散が懸念される。	資料1 P. 6 参考資料2

3	市民アンケートの分析をさらに行っていただきたい。今後詳しい内容を検討するうえで有益な情報をアンケートから把握できると思う。また、今後、ごみの分別や地球温暖化対策等の取組を進めていく際に、環境に興味のない人がどういう属性の人であるのかを明確にする必要があると思う。さらに生物多様性保全に関する取組については特に関心の強い人に活動してもらうことが必要だと思うので、それがどういう属性の人であるかも知っておいた方がいい。	・アンケート調査結果については第2回環境審議会で示したデータから回答者の属性が分かるように資料を修正している。 ・詳細は「参考資料3 市民アンケート調査結果の分析」に示すとおり。	参考資料3
4	環境基本計画及びゼロカーボンシティ宣言の認知度が低いことが課題として挙がっているが、認知度を増加させたとしてもゼロカーボンにつながるかというと、そういうことではないと思う。温室効果ガス排出量を減らしたいのであれば、太陽光発電等の再生可能エネルギーへ転換すればいいと思うが、費用負担が大きいので市民の方がすぐに取り組めないというのが現状だと思う。そういう観点から市民がゼロカーボンに向けた取組を実施できるような具体的な施策を検討する必要がある。	・ゼロカーボンへの取組、市民への周知方法等については、施策を展開するうえで補助金制度の創設をはじめとして、有効な方法等を事務局で検討している。	ー
5	望ましい環境像や基本理念は特に重要であると思うので、環境審議会でその内容を検討したい。	本日の議題1 望ましい環境像や基本理念について	資料2
6	環境基本計画の施策構成について、国や茨城県の施策構成に倣う必要はないと思う。守谷らしさを計画に反映するのであれば、豊かな自然や生物多様性に関する項目が先頭、次に循環型のライフスタイル、脱炭素、生活環境、循環型社会の項目にする等の市民が共感を得やすい構成にした方がいいと思う。	本日の議題2 計画構成の再編成（案）	資料2

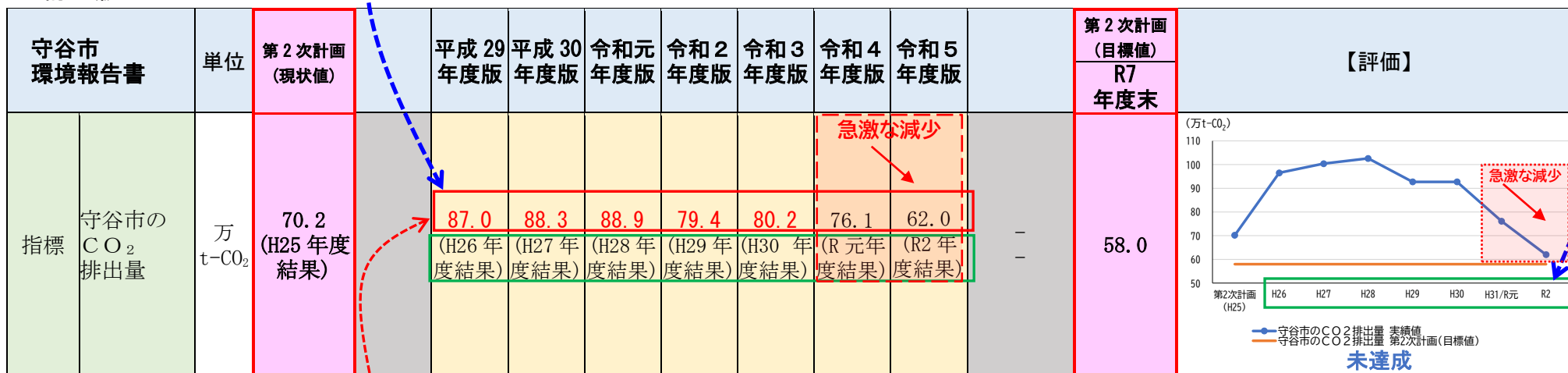
(1) 第2回環境審議会で示していた指標の訂正

- ・第2回環境審議会・資料3のP.3でお示した「守谷市のCO₂排出量」に誤りがあったので訂正します。
- ・訂正の結果、守谷市のCO₂排出量は、令和元年度（平成31年度）から令和2年度にかけて、急激に減少したことになります。

■ 第2回環境審議会で示した指標



■ 訂正版



※環境省公表結果の遡及修正に伴う修正について

平成30年度の総合エネルギー統計及び都道府県別エネルギー消費統計の改訂・更新等に伴い、環境省が公表する平成2年度、平成17年度、平成19年度～平成29年度の現況推計ファイルに対して令和3年3月に遡及修正がなされたため、守谷市における二酸化炭素排出量の推移（部門別）のデータを修正しました。（参考：環境省 部門別CO₂排出量の現況推計）（令和5年度版守谷市環境報告書 p.25より引用）

(2) 第2次守谷市環境基本計画で示されていた環境指標の現状値とその達成状況と分析

- ・ 守谷市環境報告書の令和6年度版（守谷市CO₂排出量は令和3年度値）が本日の会議で報告されます。その公表予定値（令和3年度値）を加えた図表を下記に示します。
- ・ 下記の図表をみると、令和元年度（平成31年度）から令和2年度にかけて急激に減少した排出量は、令和3年度に再び増加しています。
- ・ したがって、この排出量減少・増加の要因としては、新型コロナウイルス感染症拡大における社会経済活動の停滞と、その後の回復と推測できます。

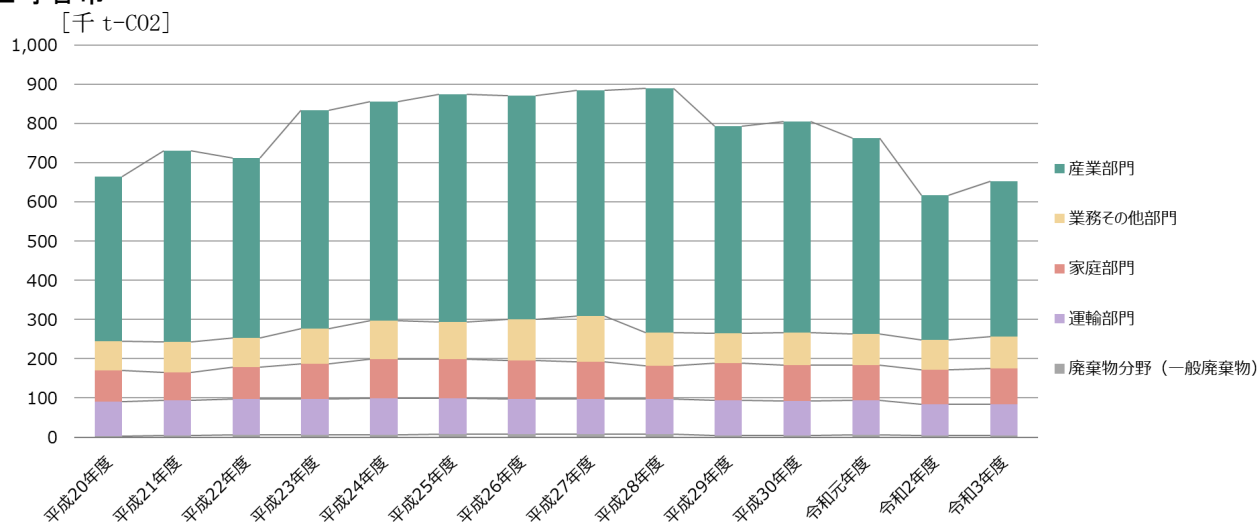
■ 訂正版（前ページ）＋令和3年度値

守谷市 環境報告書		単位	第2次計画 (現状値)		平成29 年度版	平成30 年度版	令和元 年度版	令和2 年度版	令和3 年度版	令和4 年度版	令和5 年度版	令和6 年度版 ※公表 予定値	第2次計画 (目標値) R7 年度末	【評価】
指標	守谷市の CO ₂ 排出量	万 t-CO ₂	70.2 (H25年度 結果)		87.0 (H26年 度結果)	88.3 (H27年 度結果)	88.9 (H28年 度結果)	79.4 (H29年 度結果)	80.2 (H30年 度結果)	76.1 (R元年 度結果)	62.0 (R2年度 結果)	65.2 (R3年度 結果)	58.0	※R3年度二酸化炭素排出量は、公表予定値を用いています。

〈守谷市 CO₂ 排出量における補足資料〉

- ・環境省の公表データから、守谷市、茨城県、全国の CO₂ 排出量の推移を示します。
- ・これによると、いずれも令和 2 年度に排出量が減少し、令和 3 年度は増加する傾向が見られます。

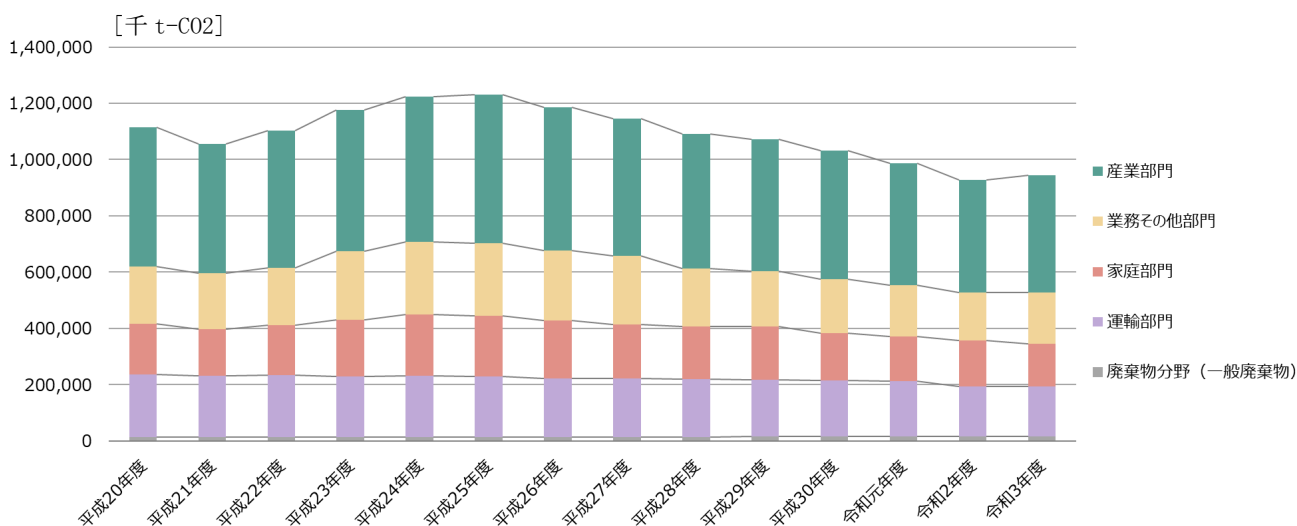
■ 守谷市



■ 茨城県



■ 全国



出典：環境省「自治体排出量カルテ」

https://www.env.go.jp/policy/local_keikaku/tools/karte.html

②公立小中学校での環境教育としての取組事例数

守谷市 環境報告書	単位	第2次計画 (現状値)		平成29 年度版	平成30 年度版	令和元 年度版	令和2 年度版	令和3 年度版	令和4 年度版	令和5 年度版	令和6 年度版 ※公表 予定値	第2次計画 (目標値)	【評価】
		H26 年度末		H28 年度	H29 年度	H30 年度	H31/R 元年度	R2 年度	R3 年度	R4 年度	R5 年度	R7 年度末	
基本目標3		環境活動について											
公立小中学校での 環境教育としての 取組事例数	事例	29		37	39	41	41	43	50	95	142	44	(事例) ●公立小中学校での環境教育としての取組事例数 実績値 —公立小中学校での環境教育としての取組事例数 第2次計画(目標値)

(取組状況)

環境問題は今日的な課題であり、学校教育の中で指導すべき教科・領域の中にも環境問題と関わりのある教材が多くあり、守谷市の環境や取組と関連づけた指導を行っています。

(増加要因)

県の方針でも自然体験等を通して、SDG'sへの関心を高め、自然環境を大切にしようとする心の育成を目指しており、各教科等と環境教育を関連させて指導しています。このような指導の成果として、公立小中学校での環境教育としての取組が委員会活動やPTAと連携した教育課程外の取組にも波及し、環境への意識が高まっていると考えられます。

(取組事例)

No.	科目	内容	No.	科目	内容
1	委員会活動	「緑の羽根募金」活動を実施し、児童や保護者に対して緑化運動への意識を高めた。(小5・6)	4	理科	タンポポ(春の生物)についての学習後、校外学習の帰校時に道端の外来種(セイヨウタンポポ)を提示し、環境への関心を高めた。(小3)
2	総合学習	「米作り」活動を実施し、里山の会の協力を得て、田で稲作を行った。平行して、社会の授業で稲作に関する学習を行った。(小5)	5	その他	学校のプールにいるヤゴ救出の取り組みの実例を通して、身近な自然に目を向け、動植物や自然環境との関わりを考えて行動しようとする心情を育てた。(道徳)(小3)
3	理科	自分たちでツルレイシを育て、収穫する体験を通して、自然の恵みを受けていることを実感することができた。(小4)	6	社会	電気自動車や環境に優しいエネルギーを使った発電方法、向上で使った水の再生などを学び、意識を高めた。(小5)